

福島の実況——レポート② 被災者の自宅は今

2013年8月20日

福島被災者支援者・千葉県松戸在住

福岡 百子

東京電力の水素爆発があって、もうすぐ2年半になるところです。

福島の被災者は、原発事故汚染のために自宅を離れざるを得なくなりました。追われるように故郷を後にし、家族もバラバラになりました。遠く、未知の地に、しかもプレハブで出来た4.5畳という仮設に住むことになりました。行き慣れた店も病院も遠い町々です。多くの方々が不便な環境に耐え忍んでおります。

「放射能汚染のために帰還できなくなった我が家は、2年以上閉めきっていたために、食物の腐敗、湿気による家中のカビ、雨漏りが酷いものです。またネズミが大発生し、柱も家具もかじられ、悪臭がひどく、住める状態ではなくなってしまいました。美しかった庭は、草茫茫、田畑も荒地になりました。町によっては、牛が群がり、イノブタ（イノシシと豚の混合）、サルなど、人間を知らない動物達が我が物顔に歩いています。」

・・・こんなお話を、よく聞くのです。

住めなくなった被災者の自宅。しかし国は、極力、除染して帰す方針でいます。被災者は防護服を着用し、自宅の片付けに行っています。費用はすべて自腹、ゴミ袋もネズミ駆除剤も、自分で買い求めなければなりません。支援金を求めても、被災者の叫びは届かない。今、福島の方々は心身疲れ果て、生きる気力も無くなった方が多いです。

「帰れないなら、帰れないとはっきり言ってください」

「中途半端だから、方針も対策もはっきり示さないから、精神的に参ってしまう」

・・・こんな声を、たくさん聞いています。

私の目から見て、福島の被災者の苦悩は一層ひどくなった気がします。「国は福島を見捨てた」そんな気持ちにさえさせられます。

人間の尊厳、生きる権利、生活の保障、労働安全、健康管理など、人として当然のことが、福島の人へは適用されないのでしょうか？と書いてしまいます。

原発の地の状況を伝える一冊の本をご紹介します。葛尾村の方が書かれた本です。『詩集 わが涙滂々——原発にふるさとを追われて』（小島 力著、西田書店、1400円＋税）。どうぞお読みください。

紙面の都合上、被災地の写真をお載せできませんが、ブログ「福島の実況——福岡百子の声」(<http://www.momfukuoka.exblog.jp/>)をご覧ください。

〈支援についての問い合わせ〉

福岡百子 (fax) 047 - 346 - 8675 (携帯) 080 - 5547 - 8675 (メール) f.mom.1941@ezweb.ne.jp

(午前10時から午後5時半までにお問い合わせいただけます)